動画内状況理解における音の役割に関する一考察
――ろう者と聴者の比較を軸に――[1)]

On the Role of Sound in Understanding Situations in Videos:
A Comparison between Deaf and Hearing People

芝　垣　亮　介[2)]・奥　田　太　郎[3)]

Ryosuke SHIBAGAKI and Taro OKUDA

概　　要

本論文では，モバイル･デジタル端末を介した動画サービスの利用が，多様な文化的背景をもつ人々に共通する重要な情報インフラとして今後ますます重要になってくるという見通しのもと，動画内の状況を理解するうえで音がどのような役割を果たしているのかについて，音声言語と手話言語という異なる言語を使用する者（文化背景の異なる者）の間での比較調査を通じて，その解明の哲学的な手がかりを得ることを目指す。具体的には，登場人物の人間関係を理解する必要のあるテレビドラマのワンシーンでの状況認識，および，出来事や事実の理解をする必要のあるニュース番組での状況認識について，日本手話話者のろう者と日本語話者の聴者を調査協力者として，字幕付きの動画を消音，有音，手話同時通訳の有無の組み合わせで再生し，見終えた協力者に対してインタビューを行なう，という方法で比較調査を実施した。調査の結果，動画内状況の理解における音の役割に関して，(1) 登場人物の人間関係の把握，(2) 背景状況の把握，(3) 感情表現の把握の 3 点について新たな発見が得られた。

1．研究の目的

ウェブを通じた動画サービスの利便性の向上，および，スマートフォンなどのモバイル・デジタル端末の普及などにより，動画を利用した情報伝達を用いる事業者等も増え，それに伴って，動画

1）本論文は令和 5 年度厚生労働省科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）「医療現場における対面および遠隔での手話通訳を介したコミュニケーション時に生ずる意思疎通不全要因の研究（22GC1011）」の助成を受け作成したものである。

2）しばがき・りょうすけ　椙山女学園大学国際コミュニケーション学部

3）おくだ・たろう　南山大学社会倫理研究所

を通じて情報収集を行なうことは多くの人々にとって日常茶飯事となっている。その意味で，動画サービスの利用は，現代社会に生きる人々に共通する重要な情報インフラを構成しているとも言えるだろう。そうしたなか，情報インフラとしての動画サービスを利用する人々の環境と状況は多様であり，動画の受け止められ方が人々の間でどの程度共通で，どの程度違っているのかを，それぞれの環境や状況に応じて把握していく必要性が生じている。

たとえば，使用言語の異なる者の間で，動画内の状況理解がどの程度違っているのかは，それほど明らかだとは言えない。AI 技術等の進展により，動画内音声の字幕化やその各国語への翻訳が一定レベルの精度で自動生成されるようになったことで，異なる言語の使い手が同一の動画から共通の情報を受け取る場面も今後増えてくると予想される。そうした情勢のもと，スマートフォンやタブレット等のモバイル端末での動画サービスの利用から大きな恩恵を受けている人々として，音声言語の使い手である聴者はもちろん，むしろ，手話言語の使い手であるろう者を挙げることができる。ろう者は，意思疎通や情報伝達の場面で視覚的に得られる情報を専ら利用するため，動画を自由に利用できるツールが手元にあることは，母語である手話言語を用いたコミュニケーションを行なううえでも，音声言語由来の情報を視覚化して得るうえでも，生活の質を飛躍的に向上させると言えるだろう。音声言語と手話言語という異なる言語の使い手が，同一の動画をどのように受け止めており，両者の間の共通性と違いの実態がどうなっているのかについて解明することは，異言語使用者間に共通の情報インフラとして動画サービスを発展させるうえで，不可欠な課題だと考えられる。

以上の問題意識のもと，本論文では，動画内の状況を理解するうえで音がどのような役割を果たしているのか[4)]について，音声言語と手話言語という異なる言語を使用する者の間での比較調査を通じて，その解明の手がかりを得ることを目指す。今回は，登場人物の人間関係の理解をする必要のあるテレビドラマのワンシーンでの状況認識，および，出来事や事実の理解をする必要のあるニュース番組での状況認識について，ろう者と聴者を調査協力者とした比較調査を実施した。本論文の目的は，動画内状況の理解における音の役割を解明する哲学的な手がかりをインタビュー調査から得ることであり，量的・質的な実証を直接の目的とはしていないことに留意されたい。

なお，本論文の構成は，以下の通りである。第 2 節において，テレビドラマの状況認識について，第 3 節において，ニュース番組の状況認識について，それぞれの調査の経過と結果を述べる。第 4 節では，調査結果に関する考察を行い，そこから見えてきた課題について第 5 節で言及する。

2. テレビドラマでの状況認識に関する調査

本節では，テレビドラマのワンシーンでの状況認識に関する調査（以下，テレビドラマ調査）に

4）なお，音と映像の相互作用に関して，音楽と映像の調和に関する研究が多数見られるが，音楽ではない音や声と映像の関係性についての先行研究は多いとは言えない。音楽を含む音が視聴者に与える影響のなかで，映像の記憶促進の側面については複数の先行研究があり，代表的なものとして岩宮（1992），Boltz, Schulkind, & Kantra（1991），吉岡 & 岩永（2007）などが挙げられる。また，映像の物理的な理解の側面に関する音と映像の相互作用の研究として，東北大 & 産総研グループ（2009）が，音によって静止した映像が動いて見えることを明らかにしている。一方，登場人物の人間関係や場面設定といった映像の状況の理解と音声の関係性に関する先行研究は十分あるとは言えない状況である。

ついて，その設定，調査の経過，結果を説明する。

本調査で使用したテレビドラマは，中国で制作されたテレビドラマで，登場人物は音声中国語で話しており，画面下に日本語字幕が付されている。登場人物は，20 代の女性，50 代の女性，20 代の男性，50 代の男性の 4 名で，女性 2 人は親子，男性 2 人は会社の部下と上司である。使用した場面は，お見合いの食事会のワンシーンであり，20 代の女性はお見合いに対して消極的な態度を取っている。お見合い相手の 20 代の男性の物言いは荒々しく，横柄な田舎者といった風情である。

この中国のテレビドラマのワンシーンでの状況理解について，日本手話話者であるろう者と日本語話者である聴者に対してそれぞれ調査を行なった。テレビドラマの音声は中国語であり，動画には常に日本語字幕が付いている。この基本設定に加え，動画再生の仕方は，消音，有音，手話通訳の有無の組み合わせで設定した。今回の調査で採用した組み合わせは，表 1 の通りである。ろう者は音を認識しないため「有音＋字幕」の設定での調査は行なわず，今回調査に協力した聴者は手話を理解しないため「消音＋字幕＋手話同時通訳」の設定での調査は行なっていない。なお，すべての動画は，ろう者と聴者どちらのグループについても，椅子に座った全員の前に 1 台の大型モニタを設置し，その画面上で動画を再生した。

表 1　テレビドラマ調査における調査協力者と動画再生の設定の組み合わせ

	消音＋字幕	消音＋字幕＋手話同時通訳	有音＋字幕
ろう者	（ア）	（イ）	
聴者	（ウ）		（エ）

2.1　テレビドラマ調査：ろう者の場合

本調査は，6 名のろう者を調査協力者として実施された。6 名全員が生来のろう者であり，日本手話の母語話者である。年齢構成は，50 代 1 名，60 代 4 名，70 代 1 名である。

再生された動画は，中国のテレビドラマのワンシーンであり，長さは 1 分 29 秒である。動画の再生時間を短く設定したのは，調査協力者の記憶力を問わないためである。

2.1.1　動画再生の設定

動画再生は，まず表 1 の（ア）「消音＋日本語字幕」の設定で，次に（イ）「消音＋日本語字幕＋手話同時通訳」の設定で行なわれた。なお，本調査は，ろう者と聴者が同環境で動画を見る（ア）と（ウ）での状況認識について比較検討を行なうことを主たる狙いとする。しかし，ろう者にとって母語ではない日本語の字幕を追ってテレビドラマを見ることは，聴者にとって母語である日本語の字幕を追ってテレビドラマを見ることと類似の状態だとは言えない[5]ため，（イ）も行なった。（イ）では，消音状態で表示される日本語字幕のみを参照して手話通訳者が画面横で手話への同時通訳を行ない，ろう者はその手話と画面を視野に収めて動画を見た。

なお，（イ）の設定時に，手話通訳者が，有音状態ではなく消音状態で日本語字幕のみを参照して手話通訳をするようにした理由は 2 点ある。1 点目は，部分的に音声を認識できるろう者がいた

5）動画を見ながら日本語字幕を読むことの困難さについては，次の 2.1.2「経過と結果」のなかで言及するが，実際に（ア）では，ほぼすべてのろう者が字幕を追いきれなかった。

場合に，動画の内容に集中できるようにするためである。もう１点は，（ウ）の聴者が消音状態で認識する時との比較のために，動画再生の環境を聴者とろう者の間で可能な限り同じ条件にするためである。（ウ）において聴者は，日本語字幕から状況に関する情報を得るが，その際，今回の日本語字幕には登場人物の声に含まれる情報は含まれておらず，同様に，机と手の接触する音，足で床を継続的に打つ音なども，字幕には含まれていない。たとえば，登場人物の一人が荒々しい声を発していても，字幕からはそのことを認識できない。ろう者に対して同様の動画再生環境を設定するためには，手話通訳に登場人物の声の出し方，感情等が反映されないように，消音状態で日本語字幕だけを参照して手話に通訳する方が，より（ウ）の環境に近いと考えた[6)]。

2.1.2　経過と結果

調査を始めるに当たり，すべての調査協力者に対して，本調査の趣旨，参加の同意および同意撤回の任意性について説明した。その際，本調査では，動画内の状況の理解に関する質問をするが，調査協力者の理解能力を問うわけではなく，動画再生の設定と動画内の状況理解の間にあるズレを把握するためであり，個々の調査協力者の個人情報はまったく取得しないことを確認した。この説明に関しては，以下 2.2.2，3.1.2，3.2.2 で述べる調査においてもすべて同様の手順を踏んだ。

調査は，まず（ア）の消音＋字幕有りの状態で，中国のテレビドラマの動画をろう者に対して再生して行なわれた。再生後，字幕を追えたか質問をしたところ，多くのろう者が，字幕が早過ぎて追いきれない部分があったと回答した[7)]。その後さらに，同じ動画を今度は手話同時通訳付きで再生した。

再生後，動画の内容に関するインタビューを実施した。なお，ここでは，動画内状況の理解における音の役割の解明の手がかりを得るうえで重要とみなされうる質問項目，すなわち，聴者に対する調査（2.2）と比較して哲学的に興味深い結果となった質問項目にのみ焦点を当てる。

質問１　登場人物のうち若い男性と年齢が上の男性の関係を教えてください。

この質問に対して，６名のろう者のうち５名が，親子ではないと回答した。５名の回答は，会社の同僚（２名），親戚（１名），麻雀仲間（１名），大学の教員と学生（１名）であった。

質問２　登場人物のうち若い女性と年齢が上の女性の関係を教えてください。

６）有音状態のテレビドラマの日本語字幕を手話に通訳する場合，手話という言語の特性上，手話通訳者がテレビドラマの登場人物の声等の情報を無意識に通訳に加える可能性がある。この点については西田（2021）が説明するように，全通研における手話通訳の在り方において，手話通訳者は言葉の置き換えをするのではなく，意図することが伝わるようにすることが大事であると説明されており，無意識的に起点テクストに含まれる様々な情報を手話通訳に反映させる可能性が十分あると考えられる。これは手話に限らず通訳 / 翻訳という作業の近年の流れであり，ピム，武田訳（2020）が，翻訳を「目的を持った異文化間の行為」と定義し，翻訳の目的が目標テクストに影響を及ぼすと述べているように，字幕という翻訳テクストを目標テクストに再媒介する手話通訳にも同様の議論が当てはまると考えられる。

７）ろう者が字幕を追いきれなかった理由に，個人差こそあるが，生来のろう者は母語が日本手話であり日本語ではないことが挙げられる。実際，日本語の読み書きに対して，聴者に比べ困難を感じる場合が散見されるのはそのためである。ろう者の書記日本語の能力については上農（2020）を参照されたい。

ろう者はこの質問に対して，6 名中 5 名が親子，1 名が親戚（叔母）と回答した。

なお，再生された動画内では，この質問への回答は明示されていない。あくまで動画内のやりとりの様子から回答を推測する他はなく，やりとりの中心を構成する 4 名の会話のなかにも，それぞれの人間関係に言及する箇所はまったく存在しない。質問 1 および 2 においてろう者は，前後の文脈がないなかで，登場人物の人間関係を探り，上述の通り回答したことになる。

2.2　テレビドラマ調査：聴者の場合

本調査は，15 名の聴者を調査協力者として実施された。15 名全員が日本語の母語話者である。年齢構成は，全員が 20 代（大学 3 年生および 4 年生）である。

再生された動画は，2.1 で用いたものと同じであり，長さは 1 分 29 秒である。動画の再生時間を短く設定したのは，調査協力者の記憶力を問わないためである。なお，調査協力者の 15 名は全員，中国語に関する知識を一切有していない。

2.2.1　動画再生の設定

動画再生は，表 1 の（ウ）「消音＋日本語字幕」，および，（エ）「有音＋日本語字幕」の設定で行なわれた。

2.2.2　経過と結果

調査協力者となった 15 名の聴者のうち，12 名に対しては，先に（ウ）「消音＋日本語字幕」の状態で再生し，その後同部分について（エ）「有音＋日本語字幕」で再生した。また，3 名に対しては，先に（エ）「有音＋日本語字幕」の状態で再生し，その後，他の調査を挟んで，時間を 1 時間ほどあけてから同じ動画を（ウ）「消音＋日本語字幕」の状態で再生した。なお，（ウ）→（エ）の集団と（エ）→（ウ）の集団において，（ウ）および（エ）の各パートに関する意見や回答に目立った違いは見られなかった。それぞれ動画再生後に，いくつかの質問項目に対する筆記による回答と，その回答についてのインタビューを行なった。

なお，2.1.2 と同様，ここでも，動画内状況の理解における音の役割の解明の手がかりを得るうえで重要とみなされうる質問項目，すなわち，ろう者に対する調査（2.1）と比較して哲学的に興味深い結果となった質問項目にのみ焦点を当てる。

質問 1　登場人物のうち若い男性と年齢が上の男性の関係を教えてください。

この質問に対して，消音状態で日本語字幕を見た（ウ）では，15 名の聴者のうち，8 名が親子であると回答，4 名が親子ではないと回答，3 名が無回答という結果であった。親子でないと回答した 4 名の回答は，会社の上司と部下，友人であった。一方，有音状態で日本語字幕を見た（エ）では，15 名のうち 2 名が親子と回答，12 名が親子ではないと回答，1 名が無回答という結果であった。

質問 2　登場人物のうち若い女性と年齢が上の女性の関係を教えてください。

この質問に対して，（ウ）「消音＋日本語字幕」，（エ）「有音＋日本語字幕」を通じて 15 名の聴者

すべての回答に変化はなく，15 名中 14 名が親子であると回答し，1 名が親戚（叔母）であると回答した。

3. ニュース番組での状況認識に関する調査

本節では，ニュース番組での状況認識に関する調査（以下，ニュース番組調査）について，その設定，調査の経過，結果を説明する。

本調査で使用したニュース番組は，卓球の福原愛選手にフォーカスした中国のニュース番組であり，福原選手は，中国メディアから中国語でインタビューを受けている。福原選手自身の応答も含め，ニュース番組の音声はすべて中国語であり，動画には常に日本語字幕が付いている。今回使用したのは，全体で 6 分程度のニュース番組のうち，特定のインタビュー場面の部分である。インタビューは終始屋外で行なわれていることが，背景から明らかである。

動画内容は次の通りである。福原選手は，思い入れのあるアジア大会に参加することに対する感想を述べている。また，自身 4 回目の出場であり，出場回数が多いということで，自身がベテランになってきていると語る際に，チームメイトの平野選手が一回りも下の世代であることに言及し，自身を「おばさんだ」と表現しながら声を出して大きく笑うシーンがある。

このニュース番組での状況理解について，日本手話話者であるろう者と日本語話者である聴者に対してそれぞれ調査を行なった。動画再生の仕方には，消音，有音，手話通訳の有無の組み合わせがあり，今回の調査で採用した組み合わせは，表 2 の通りである。ろう者は音を認識しないため「有音＋字幕」の設定での調査は行なわず，今回調査に協力した聴者は手話を理解しないため「消音＋字幕＋手話同時通訳」の設定での調査は行なっていない。なお，すべての動画は，ろう者と聴者のどちらのグループについても，椅子に座った全員の前に 1 台の大型モニタを設置し，その画面上で動画を再生した。

表 2　ニュース番組調査における調査協力者と動画再生の設定の組み合わせ

	消音＋字幕	消音＋字幕＋手話同時通訳	有音＋字幕
ろう者	（オ）	（カ）	
聴者	（キ）		（ク）

3.1　ニュース番組調査：ろう者の場合

本調査は，2.1 の調査に参加した 6 名のろう者を調査協力者として実施された。6 名全員が生来のろう者であり，日本手話の母語話者である。年齢構成は，50 代 1 名，60 代 4 名，70 代 1 名である。

再生された動画は，中国のニュース番組の一部分であり，長さは 35 秒である。動画の再生時間を短く設定したのは，調査協力者の記憶力を問わないためである。

3.1.1　動画再生の設定

動画再生は，まず表 2 の（オ）「消音＋日本語字幕」の設定で，次に（カ）「消音＋日本語字幕＋

手話同時通訳」の設定で行なわれた。なお，本調査は，ろう者と聴者が同環境で動画を見る（オ）と（キ）での状況認識について比較検討を行なうことを主たる狙いとする。しかし，ろう者にとって母語ではない日本語の字幕を追ってニュース番組を見ることは，聴者にとって母語である日本語の字幕を追ってテレビドラマを見ることと類似の状況だとは言えないため,（カ）も行なった。（カ）では，消音状態で表示される日本語字幕のみを参照して手話通訳者が画面横で手話への同時通訳を行ない，ろう者はその手話と画面を視野に収めて動画を見た。

3.1.2　経過と結果

調査は，まず（オ）の消音＋字幕有りの状態で，中国のニュース番組の動画をろう者に対して再生して行なわれた。再生後，字幕を読み切れたかどうか，理解できたかどうかについて質問したところ，多くのろう者が，大部分は理解したが，字幕が長いところ，地名を含む難解な漢字を読むことができず苦労をした,と回答した。その後さらに,同じ動画を今度は手話同時通訳付きで再生した。

再生後，動画の内容に関するインタビューを実施した。なお，ここでは，動画内状況の理解における音の役割の解明の手がかりを得るうえで重要とみなされうる質問項目，すなわち，聴者に対する調査（3.2）と比較して哲学的に興味深い結果となった質問項目にのみ焦点を当てる。

質問 3　福原愛さんは屋内，屋外のどちらでインタビューを受けていましたか。

この質問に対して，6 名のろう者のうち，3 名が屋内，3 名が屋外と回答した。

質問 4　福原愛さんはインタビュー最後にどれくらい笑っていましたか。

この質問に対して，6 名中 6 名が，笑顔あるいは苦笑いと回答した。

3.2　ニュース番組調査：聴者の場合

本調査は，5 名の聴者を調査協力者として実施された。5 名全員が日本語の母語話者である。年齢構成は，全員が 20 代（大学 3 年生および 4 年生）である。

再生された動画は，3.1 で用いたものと同じであり，長さは 35 秒である。動画の再生時間を短く設定したのは，調査協力者の記憶力を問わないためである。なお，調査協力者の 5 名は全員，中国語に関する知識を一切有していない。

3.2.1　動画再生の設定

動画再生は，まず表 2 の（キ）「消音＋日本語字幕」，および，（ク）「有音＋日本語字幕」の設定で行なわれた。

3.2.2　経過と結果

調査協力者となった 5 名の聴者に対して,（キ）および（ク）の設定で動画を再生した。（キ),（ク）の設定での動画再生がそれぞれ終わった後に，いくつかの質問項目に対する回答をインタビュー形式で求めた。

なお，第 2 節で扱ったテレビドラマ調査と同様，ここでも，動画内状況の理解における音の役割

の解明の手がかりを得るうえで重要とみなされうる質問項目，すなわち，聴者に対する調査（3.1）と比較して哲学的に興味深い結果となった質問項目にのみ焦点を当てる。

質問３　福原愛さんは屋内，屋外のどちらでインタビューを受けていましたか。

この質問に対して，５名全員が，（キ）「消音＋日本語字幕」と（ク）「有音＋日本語字幕」のどちらの設定においても，屋外と回答した。

質問４　福原愛さんはインタビュー最後にどれくらい笑っていましたか。

この質問に対して，（キ）「消音＋日本語字幕」の設定では，５名全員が，笑顔あるいは苦笑いと回答した。他方，（ク）「有音＋日本語字幕」の設定では，５名全員が，大きな声を出して笑ったと回答した。

4. 考察

以上の調査結果から，動画内状況の理解における音の役割に関して，（1）登場人物の人間関係の把握，（2）背景状況の把握，（3）感情表現の把握，という３点で発見があった。

4.1　動画内の登場人物の人間関係の把握

テレビドラマ調査の結果のうち，２人の男性登場人物の人間関係について尋ねた質問１の回答人数をまとめると，表３の通りである。

表３　質問１（男性登場人物の人間関係）への回答人数（無回答を除く）

		親子と判断	親子ではないと判断
聴者	（ウ）消音＋字幕	8	4
	（エ）有音＋字幕	2	12
ろう者	（イ）消音＋字幕＋手話	1	5

本調査で使用した動画は，テレビドラマのお見合い場面だけを前後の文脈のない仕方で抽出した状態で再生された。そのため，文脈を欠いた短時間のワンシーンを見ただけで，動画内の登場人物の会話や表情からその人間関係を推測することになる。なお，動画内に登場する２人の男性の関係は，物語の設定上，親子ではない。

まず聴者に注目してみると，動画の設定が消音の場合と有音の場合とで，多数の回答者が異なる回答をしている。動画内の音の有無によって，登場人物の感情，性格，受け答えの丁寧さといった情報の認識に差が生じることは予想していたが，動画内の音の有無が，登場人物の人間関係の認識に大きく影響を及ぼしたのは，注目に値する結果だと考えられる。さらに言えば，本調査に参加した聴者は，テレビドラマ内の使用言語である中国語についてまったく何の知識も有していないため，

中国語の意味を一切理解しないまま，音のみで人間関係を把握する手がかりを得ていたことになる。また，今回の結果を見る限りでは，消音の場合よりも有音の場合の方が，正答率が高かったと捉えることもできる。この点で，聴者が動画内の状況を理解するうえで，音の役割が非常に大きいという見込みが得られた。

他方，ろう者に注目すると，2人の男性登場人物の関係が親子ではない，と判断した者が多かった。この回答傾向を聴者の回答傾向と比較すると，ろう者の回答傾向は，聴者の消音状態での回答傾向ではなく，有音状態での回答傾向と類似していることがわかる。言うまでもなく，ろう者は，音を認識しておらず専ら視覚情報に基づいて動画内の状況を理解しているわけだが，登場人物の人間関係の把握について，ろう者による動画内状況の理解のあり方（状況認識様式）が，聴者による有音状態での動画内状況の理解のあり方（状況認識様式）と類似している可能性がある。換言すれば，ろう者は，動画内の状況の理解，とりわけ，登場人物の人間関係の把握については，有音状態での聴者と同程度の豊富な情報を得ている可能性がある。

他方，テレビドラマ調査の結果のうち，2人の女性登場人物の人間関係について尋ねた質問2の回答人数をまとめると，表4の通りである。なお，動画内に登場する2人の女性の関係は，物語の設定上，親子である。

表4　質問2（女性登場人物の人間関係）への回答人数

		親子と判断	親子ではないと判断
聴者	（キ）消音＋字幕	14	1
	（ク）有音＋字幕	14	1
ろう者	（カ）消音＋字幕＋手話	5	1

まず聴者に注目してみると，男性登場人物の場合とは異なり，表4の通り，2人の女性登場人物の関係については，消音状態の場合と有音状態の場合で，全員が同じ回答をした。

この結果についての示唆は，以下の通りである。聴者は，消音状態では有音状態ほど豊富な情報を得られないため，男性登場人物の人間関係の場合のように，消音状態で，人間関係を読み解くための情報を得られていない場合には，同じ動画の有音状態に接した際に当初の人間関係の把握に対する補正が入り，より正確な認識に至る。他方で，2人の女性登場人物の人間関係の場合のように，消音状態で何らかの仕方で正確な関係性把握のための情報を得られている[8)]場合には，有音状態で同一の動画を見ても，動画内の状況理解に変化は起こらない。

また，ろう者は，表4に示されているように，男性登場人物の場合と同様に，女性登場人物の場合についても，消音状態で人間関係を読み解くための情報を得ていることがわかる。

8）女性登場人物の人間関係の把握について，消音状態においても正確な関係性把握のための情報が得られていた要因は，いくつも考えられる。たとえば，調査に参加した聴者はいずれも女性であったため，女性間の人間関係の把握に馴染みがあった可能性がある。あるいは，テレビドラマにおける女性の親子関係の描かれ方に，男性の場合に比べてより強いステレオタイプが看取された可能性もあるだろう。今回の調査研究では，この点については解明できないが，ひとまずここでは，聴者の場合，動画内の登場人物の人間関係の把握に音が大きな役割を果たす，ということが示されていればよい。

4.2　動画内の背景状況の把握

ニュース番組調査の結果のうち，福原選手がインタビューを受けている場所（屋外か屋内か）について尋ねた質問３の正答率をまとめると，表５の通りである。

表５　質問３（インタビュー背景状況：屋内／屋外）の正答率

	正答率
聴者	100%
ろう者	50%

ニュース番組調査で用いた動画で福原選手がインタビューを受けている場所は，明らかに屋外であるが，表５の通り，ろう者は，聴者に比べて，目に映る背景状況を捉えきれていなかったことがわかる。

この点をめぐるろう者へのインタビューのなかで，字幕や手話を見ているため背景の状況等が目に映りにくいことを多くのろう者が理由に挙げた。しかしながら，前述の通り，登場人物の人間関係を問う正答率は，ろう者において高く，今回の場合もまったく動画内容が視野に入っていなかったとは必ずしも言えないだろう。一般的に，ろう者は視野が広いと言われ，視界に入っている事象を無意識的に情報処理しており，その処理量は，聴者より多いと言われている。この調査が示唆するのは，必ずしもそういうケースばかりではなく，場合によっては聴者よりも視野に入る情報が少なくなることもある，ということである。したがって，ろう者が動画を利用して様々な情報を十分に得られるような情報環境を整備するためには，ろう者の視覚情報処理が適切に行なわれる条件について，さらなる研究が求められる。

4.3　動画内の感情表現の把握

ニュース番組調査の結果のうち，取材を受けている福原選手の笑い方について尋ねた質問４の回答人数をまとめると，表６の通りである。

表６　質問４（福原選手の笑い方）への回答人数

		笑顔 / 苦笑い	大笑い
聴者	（キ）消音＋字幕	5	0
	（ク）有音＋字幕	0	5
ろう者	（カ）消音＋字幕＋手話	6	0

動画内での福原選手の笑い方は，自身のことを「おばさん」と表現しながら自虐的な表情とも受け取れるものであったため，消音状態で彼女の表情から視覚的に笑い方を判断すると，「笑顔／苦笑い」と回答するのは不思議なことではない。実際，今回の調査に参加した聴者とろう者の全員が，消音状態で「笑顔／苦笑い」と回答している。しかし，有音状態では，福原選手が大きく声を出して朗らかに笑っていることがわかる。実際，無音状態で見た後に有音状態で同じ動画を見た聴者か

らは,「こんなに笑っていたんだ」という驚きの声も出た。

ウィトゲンシュタインの言葉で捉えるなら，聴者の生活においては，朗らかに笑うという概念の「文法」のなかに，大きな声を出すことが含まれており，聴者はそれを「規準」として目の前の人物が朗らかに笑っているのかそうでないのかを判別している[9)]が，消音状態の動画ではその「規準」が満たされないので,「笑顔／苦笑い」と回答した，ということになる。実際，すべての聴者が，有音状態の動画再生の際に福原選手が「大笑い」をしていると回答している。

他方で，ろう者の生活においては，朗らかに笑うという概念の「文法」のなかに，大きな声を出すことは含まれておらず，ろう者にとってそれは「規準」ではない。一見すると，消音状態での聴者とろう者の動画内状況の認識は同じように見えるが，この観点から捉えれば，まったく別の認識が生じていることがわかる。動画サービスが今後，異なる文化を背景とする人々に共通の情報インフラとしてより重みを増すとすれば，ウィトゲンシュタイン的な「規準」や「文法」の観点からの研究も必要となるだろう。

5. 課題

本調査の問題点や新たに見えた課題について，主要なものを述べる。1 点目として，本調査の協力者の年齢構成が，ろう者と聴者とで大きく異なっていたことが挙げられる。具体的には，ろう者は 50 代から 70 代であり，聴者は全員が 20 代（大学生）であった。テレビドラマ調査では，お見合いの場面が用いられたが，場面のなかでの状況認識や人間関係の把握の精度に人生経験やこれまでのドラマ鑑賞歴が反映されている可能性は否定できない。今後，世代をコントロールした調査を行なうことが望まれる。

2 点目としては，調査協力者の男女比の問題がある。今回の調査では，6 名のろう者の性別構成は男性 3 名，女性 3 名であったが，聴者は 15 名全員が女性であった。註 7 でも触れたように，テレビドラマ調査において，男性登場人物の人間関係に関する質問への回答傾向と，女性登場人物の人間関係に関する質問への回答傾向が，聴者において大きく異なっていたことから，回答者の性別がこれらの質問の回答に何らかの仕方で影響している可能性は否めない。今後，性別をコントロールした調査を行なうことも必要であろう。

3 点目としては，手話言語の特性をどの程度考慮するかという問題がある。今回の調査では，動画内状況の理解における音の役割を調べることが目的であったため，意図的に，手話通訳に動画内の音声が反映されないよう配慮した。手話言語には，聴者にとっての音に相当する幅広い語彙と表現法があり，十全な仕方での手話通訳を介した場合に，ろう者たちの動画内状況の理解がどう変化するのかについて調査を行なうことも必要であろう。このことは，今後，医療現場などで，モバイル端末での動画サービスの利用による基本情報のやりとりが，どの言語の話者にとっても十分な仕方で行なえるようになるために必須の検討事項である。

9）ウィトゲンシュタインの「規準」と「文法」については, 古田 2022（とりわけ, 第二章）での理解を参照している。

文献

Boltz, M.G., Schulkind, M., and Kantra, S. [1991] “Effects of background music on the remembering of filmed events”, *Memory & Cognition 19*, pp. 593–606.

岩宮眞一郎［1992］「オーディオ・ビジュアル・メディアを通しての情報伝達における視覚と聴覚の相互作用に及ぼす音と映像の調和の影響」『音響学会誌』48 巻 9 号，649–657 頁。

上農正剛［2020］「聾教育における手話と書記日本語の問題：現実の中で議論するために」『手話学研究』29 巻 2 号，79–93 頁。

東北大学大学＆独立行政法人産業技術総合研究所グループ［2009］「音が「見せる」映像の動き：高臨場感マルチメディア技術・感覚代行技術の開発につながる成果」，東北大学プレスリリース，東北大学電気通信研究所。

西田朗子［2021］「手話通訳と手話通訳者の機能と在り方に関する一考察」『立命館産業社会論集』57 巻 1 号，145–164 頁。

ピム，A.［2020］武田珂代子訳『翻訳理論の探究』新装版，みすず書房。

古田徹也［2022］『このゲームにはゴールがない：ひとの心の哲学』筑摩書房。

吉岡賢治，岩永誠［2007］「映像と音楽の相互作用における記憶促進要因」『広島大学大学院総合科学研究科紀要 I 人間科学研究』2 巻，35–45 頁。